



オーガスト
オフィシャルハンドブック
2015年新春号

大図書館の羊飼

a good librarian like a good shepherd

Library Party

includes

オーガスト最新作情報

▼ AUGUST

P R E F A C E — ま え が き

こんにちは、オーガストです。

初めての方、はじめまして。

何度目かの皆様、いつもご愛顧頂きありがとうございます。

TVアニメ『大図書館の羊飼い』の放送が10月から始まりました。

当小冊子が配布される頃には最終話の放送も終わっているかと思いますが、ご覧いただけただしょうか？

今回のアニメでは早い段階からオーガストのスタッフが監修に加わり、制作過程にかなり携わらせていただきました。

お楽しみいただけていたら幸いです。

また、PSVITA版『大図書館の羊飼い -Library Party-』の開発が佳境を迎えております。

このまま無事審査を通れば告知通り2015年2月12日に発売となりますので、ご興味をお持ちの方は是非ご予約下さいませようお願いいたします。

それでは、多少のお時間を拝借致しますが、オフィシャルハンドブックをお楽しみ下さい。

2014年冬 オーガスト/ARIA 拝

CONTENTS

3 …… 『大図書館の羊飼い』Short Story
小さな体、大きな思い出

9 …… 新作情報

10 …… スタッフ対談

11 …… あとがき



Suzuki Kana

小さな体、大きな思い出

文・安西秀明
絵・夏野イオ

昼休みのアブリオ前広場では、多くの生徒が憩いの時間を過ごしている。それに混じって、俺と紗弓実も芝生の上でだらだらとしていた。

あぐらをかいた足の上に、紗弓実の頭が乗っている。「こうしていると、ずっと京太郎の顔を見ていられますね」

見上げてくる紗弓実と視線が交わった。紗弓実の輪郭を指でなぞると、くすぐったそうに目を細める。

「ふふ、どうしたんですか京太郎？」

そう言いつつも、紗弓実の頬は紅潮していく。紗弓実の唇に触れると、温かい吐息が指先にかかった。思わず、顔を近づけてしまいそうになる。

「野外で何をしているのかしら」

背後から声をかけられて振り返ると、呆れた顔の望月さんが俺たちを見下ろしていた。

「アブリオにいないと思ったら、ここにいたのね」

「おや望月さん、乳離れできない新生徒会長は一緒ではないんですか？」

「今年の生徒会も、なかなか忙しいみたいなの」紗弓実の言葉をひらりとかわす望月さん。望月さんは生徒会長を引退し、今は多岐川さんが新たな生徒会長だ。

「望月さん、俺たちを探してたんですか？」

「ええ。三日後には卒業式だし、嬉野さんが寂しがつてないか心配だったのよ」

「別に会えなくなるわけでもありませんし、何を言っているんだか」

面倒くさそうな顔になった紗弓実が体を起こす。スカートを抑えて、芝生の上に足を伸ばした。なぜか望月さんは少しだけ逡巡するような表情を見せて、すぐに落ち着いた笑みを取り戻す。「私、アメリカに留学することになったの」突然の告白に、紗弓実が小さく息を吐いた。望月さんには聞こえていないようで、話を続けている。「どう？ 少しは寂しがつてくれるかしら？」

「べっ、別に連絡手段なんかいくらでもありますし、特に寂しが理由ありません」

そっぽを向く紗弓実に代わって、望月さんに質問する。

「望月さん、向こうにはいつ行くんですか？」

「入学は先だけれど、卒業式の日にはもう日本を発つ予定だわ」

留学先での生活を想像したのか、望月さんの表情は明るい。

「今日は、このことを伝えに来たの。時間を取らせてしまったわね」

「まったく、カップルの大事な時間を奪うなんて非常識です」

「ふふ、ごめんなさい。それじゃあ、またね二人とも」

挨拶をして、望月さんは立ち去っていく。望月さんの背中を見送ると、紗弓実はごろりと芝生に寝転んだ。そのまま空を見上げている。こうやって大人しくしていると、本当に人形のようにだ。

きつと望月さんのことを考えているのだろう。一度は紗弓実が拒絶したものの、去年の持久走対決を経て二人はまた友達になった。

留学という望月さんの門出は、長いお別れでもあるのだ。

「ふふふ、京太郎、いいことを思いつきました」

紗弓実がにやにやしながら起き上がった。

「私、卒業式の日にはプレゼントをあげようと思います」

「望月さんにか？」



「ええ。彼女は寂しがり屋ですからね。ああは言っていないも、心細さを感じているはずですよ」

「友達になりたくて紗弓実に話かけてきたくらいだしな」

望月さんは昔、自分と同じように孤独だった紗弓実と友達になろうとした。寂しがり屋という認識は、間違っていないように思う。

「そこで私が卒業式のあとにプレゼントを渡せば、嬉しさのあまり泣き出すはずですよ」

「泣くかどうかはともかく、きつと喜んでくれると思う」

「いいえ京太郎、これは公衆の面前で彼女を泣かせるチャンスです。誇り高き元生徒会長という肩書きを、寂しがり屋の泣き虫に塗り替えてやるんですよ」

ふむふむと頷いて、紗弓実の話をまとめてみる。

「望月さんが留学先で寂しくならないよう、形に残るプレゼントをしてあげたいってことだな」

「シャラップ！」

「ぐふっ」

紗弓実が頭から腹に突っ込んできた。相変わらず素直じゃないやつだ。

体勢を直した紗弓実が、そのままの上で居座った。顎の下で紗弓実の後頭部がもぞもぞ動いており、シャラップの香りが漂ってくる。

「プレゼントって、なにを渡すんだ？」

「ぬいぐるみにします。あの人、実はファンシー系のグッズが好きなんですよ」

意外な事実思わず言葉が詰まる。望月さんとファンシーグッズという組み合わせが、うまく想像できない。そもそも、身に着けている姿さえ見たことがなかった。もしかすると内緒にしているのかもしれない。他言はしないことにする。

「それだと望月さん、ぬいぐるみはもう大量に持っているんじゃないか？」

「大丈夫ですよ。あの人、グッズ自体はあまり持っていないですから」

「恥ずかしくて買えないとかか？」

「さあ？ とりあえず、遊びに行ったときこの目で見ましたから」

紗弓実と望月さんはたまに遊んでいるらしい。その際、望月さんの部屋にお邪魔したのだろう。

しかし今からプレゼントを選ぶとなると、けっこう急が必要がある。卒業式は三日後だ。

「京太郎、今日はさっそく材料を買いに行きますよ」

「材料？」

聞き返すと、紗弓実の後頭部が縦に揺れた。

「……ひよっとして、作るつもり？」

「子供のころ、あの人から手作りのぬいぐるみをもらったことがあるんですよ」

真意を窺うような聞き方をしたせい、紗弓実は昔の話を始めた。その声は少しだけ重い。

「お返しをしないまま、私は彼女を拒絶して転校してしまっただけです」

「その時のお返しも含めて、手作りにするってことか」

「はい。まあ、向こうが覚えているかどうかはわかりませんが」

でも紗弓実は、手作りのぬいぐるみをプレゼントすると決めた。きつと、昔のことを後悔しているのだろう。

「望月さんならきつと覚えてるよ」

「私もそんな気がします」

制作時間は三日。大がかりなものを作りでもしない限り、時間は十分な気がする。紗弓実が頑張るなら、全力でサポートするまでだ。

★
そして放課後。

なぜか紗弓実が私の部屋で作業をはじめた。まあ、半分同棲みたいな生活をしているから構わないが、テーブルの上に積んでいた本はどかされ、買ってきた裁縫道具や材料が広げられている。

「うう、こんなに手間のかかるものだったなんて」

紗弓実がぬいぐるみ作りの教本を読んで唸っていた。これも一緒に買ってきたものだ。すでにいくつかの工程は終えており、テーブルの上には切り取られた布がたくさん散らばっている。

どうやら紗弓実がウサギのぬいぐるみを作るつもりらしい。ちなみに昔、望月さんからもらったぬいぐるみはパンダだったそう。望月さんの趣味だろうか。

「よしっ！」

紗弓実が弱気になった自分を鼓舞するように声を上げた。そして針を出し、いよいよ布の縫い合わせに入る。だが針に糸を通そうとして、何度も失敗していた。

「……そういえば紗弓実って、裁縫できるのか？」

「集中しているの、話しかけないでください」

目を細め、眉間に皺を寄せて針の穴を覗んでいる。意を決したように糸を動かすと、見事に穴から外れていた。

「む、むう」

何度かそんなうめき声をあげ、紗弓実はようやく針に糸を通すことができた。今となっては遅いが、簡単に糸を通す道具が売っていたはずだ。買ってあげよかつたな。

「ええと……最初と最後は返し縫いで……あとは半返し縫い？」

教本を眺めながら、紗弓実が首を傾げていた。縫い方がわからないらしい。

「なあ紗弓実、やっぱり何か手伝おうか？」

「大丈夫です。これは私がやらないと意味がありませんから」

頑なな態度で言っただけ、別のページをめくり始める紗弓実。縫い方のページを見つけたのか、明るい顔になって手を止める。そして、本をじつと見ながら布に針を通す。

「いたっ」

早くも不穏な声が聞こえた。見ると、紗弓実が涙目になって人差し指をくわえている。目が合うと、ごまかすように視線をそらして作業を再開した。立ち上がって、柵から絆創膏を持ってくる。

「ほら、指出して」

「なんのことだか」

「いいから」

「ち、ちよっと、引っ張らないでください」

ぐいっと手を引っ張ると、わずかに赤くなつた指先が布の下から現れた。薄く出血の跡も残っている。

「もう、時間がないんですから放つておいて下さいよ」

「恋人がケガしてるのに、放つておけるわけないだろ」

紗弓実の指先がびくりと動く。抵抗しないように、ぎゅっと手を握りこんだ。しかし紗弓実の手は、くすぐったいそうにもぞもぞと動いている。

「これぐらいのサポートはしてもいいだろう？」

「……逆に迷惑になりそうです」

紗弓実は布で口元を隠していた。赤く染まった頬が、半分だけ見えている。

★

「できました……」

すでに日の変わった深夜。ようやく紗弓実がぬいぐるみを作り終えた。指に巻いてある絆創膏の数が増えている。集中しすぎて疲れたのか、ふらふらと体が揺れていた。

紗弓実は作り上げたウサギのぬいぐるみを、そっと抱き上げる。

とどこころ綿がはみ出し、糸がほつれている。そして、鼻を表現するためにつけていたボタンが、ぼろりと床に落ちた。子供が見たら泣きそうな見た目になっている。

「むきーっ！」

「お、落ち着け！」

「こんなもの渡せるわけじゃないじゃないですか！」

「初めてなんだから仕方ないって！」

ベッドに向かってウサギをぶん投げようとする紗弓実を羽交い絞めにした。

紗弓実が落ち着くのを待って拘束を解く。息を整えた紗弓実がぬいぐるみを見て、ぼつりと口を開いた。

「そういえば私……初めてじゃないです。思い出しました、私があの人にお返しをしなかった理由」

「は？」

「私もあのとき、ぬいぐるみを作って渡そうとしたんです」

「望月さんに、ぬいぐるみをもらったときか？」

「はい……でも今日みたいに失敗して、裁縫が苦手だつてことがわかって諦めたんです」

そう言うのがつくりとかな垂れ、重いため息も吐き出す。やる気を失ってしまったかと不安になったが、紗弓実はテーブルの上にある余つた材料に目を向けた。

「でも、今度は諦めるわけにはいきませんからね……作り直します」

紗弓実の肩に置こうとした手を引っ込めた。どうやら紗弓実のやる気は、この程度では揺るがなからしい。恋人を見くびってしまったことを反省しながら、俺は夜食でも用意することにした。

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

★

望月さんの留学を知って、二日後。

卒業式の前日になったが、ぬいぐるみはまだ出来上がっていないかった。

一日に一体というペースで完成にはこぎつけているものの、二体のぬいぐるみは納得のいく出来ではなかったらしい。このペースを考えると、今日の放課後が最後のチャンスだろう。

「お待たせしました、鯖定食です……ふわ」

アプリオで働く紗弓実は眠そうに欠伸をした。俺の前だから気が抜けてしまったのだろう。二日連続の



徹夜で疲れが溜まっているのだ。

「紗弓実、大丈夫か？」

「ええ、何とかコツもつかめましたし。今日でちゃんとしたものを完成させてみせます」

定食をテーブルに置いて、紗弓実が力強く頷いた。体調を聞いたつもりだったが、ぬいぐるみのことだと勘違いしたらしい。

紗弓実がカウンターに戻ろうとすると、その方向から望月さんが歩いてきた。俺たちに用があるのか、会釈をして近づいてくる。

「嬉野さん、少しいいかしら」

「な、何の用ですか」

さっきまでプレゼントの話をしていたせいか、ごまかすように目をそらす紗弓実。

「今日の夜は空いている？」

「えっ、今日ですか？」

「ええ。明日にはもう出発してしまうし、最後に食事でもしながら色々話したいと思って」

微笑みながら話す望月さんに対し、紗弓実は戸惑いさっている。

今までのペースを考えると、放課後の時間を全て制作に使うことで、ようやくぬいぐるみが一体完成する。

もし望月さんどこかへ出かけるなら、ぬいぐるみの制作は諦めることになるだろう。

「どうしてわざわざ私なんかと……家族とか後輩とか、色々いるでしょう」

「もう送別会はちゃんと終わらせたわよ。それとも最後の日を親友と過ごしたいと思うのは変かしら？」

紗弓実が視線を泳がせている。

望月さんは純粹に、親友である紗弓実と最後に思い出を作りたいのだろう。そのことを痛いほど理解しているからこそ、紗弓実も迷っている。何より、望月さんが寂しがり屋だと知っている。

紗弓実の様子を見兼ねたのか、望月さんが小さく笑ってちらりと俺を見る。

「もしかして、もう寛君と予定が入っているのかしら？」

「いえ。とりあえず後でメールします、今は仕事ですから」

「ええ、考えておいてね」

望月さんは軽く手を振って立ち去っていく。紗弓実は複雑な顔で、望月さんの背中を見送っていた。

★

放課後になり俺の部屋に戻ってきた紗弓実は、外出の仕度をしている。結局、紗弓実はぬいぐるみを選んで望月さんと過ごすことを選んだ。

俺は何度目かの同じ質問を紗弓実に投げかける。

「ぬいぐるみ、本当によかったのか？」

「完成するかどうかかわからないプレゼントよりも、最後に望月さんと一緒に過ごすことのほうが大切ですから」

合理的な紗弓実らしい判断だ。決して間違っているとは思わない。

「卒業式のあとで望月さんを泣かせられないのは残念ですけどね」

紗弓実の笑顔は虚勢にも見える。だが望月さんと一緒にいてあげたいのも、本音なのだろう。

選ぶしかないなら、どちらかを諦めるしかない。そしてこの判断はきつと正しい。俺にできるのは、後悔することのないよう背中を押してやることだ。

「ぬいぐるみの事は気にせずに、ちゃんと望月さんと楽しんでこいよ」

「ごめんなさい、京太郎にもずっと付き合ってもらっていたのに」

紗弓実がテーブルの上にある材料や裁縫道具を見やる。

「いいって。ほら、待ち合わせしてるんだろ？」

「はい。……行ってきました」

女関まで紗弓実を見送ると、リビングに戻った。そしてテーブルの上に視線をやる。

ぬいぐるみ作りの教本が広げられていて、紗弓実の貼った付箋がたくさん挟まれていた。横には絆創膏の箱が置かれていて、ケガだらけの紗弓実の指を思い出してしまふ。

テーブルの前に座り、教本を開く。

「まずは布の裁断からか」

うまく完成させる自信はない。というか、完成しない可能性のほうが大きいのだろう。それでも、このまま裁縫道具を片付ける気にはなれない。

たった二日だが、紗弓実の本気だった。その頑張り、無駄にさせたくはない。

★

「いてっ」

指に針が刺さり、思わず声が出る。もう何度目だろうか。絆創膏を貼るのも面倒になってきた。とりあえず血をティッシュで拭き取る。

気が付くと、もう0時が近い。紗弓実はまだ帰ってきいていなかった。まだ望月さんと一緒にいるのだろうか？ 心配になり、電話をかけたようとする。

携帯を開いたところで、ちょうど玄関の開く音がした。紗弓実が疲れた足取りでリビングに入った。

「おかえり、どうだった？」

「あの人の家まで連れて行かれてましたよ」

話しながら、紗弓実が俺の手元を凝視した。

手の中にある布を見て、紗弓実の目が見開かれる。帰ってくる前に完成させるのが理想だったのだが、まだ一つもパーツを縫い終わっていない。

「悪い、完成できれどと思っただけだ」

「京太郎、どうして」

「紗弓実の努力を無駄にさせたくなかったんだ」

紗弓実はがくつと肩を落としながら、長いため息を吐いた。どうやら、かなり呆れられているらしい。そのまま近寄ってきて、俺の横にべたりと座り込んだ。

「馬鹿な彼氏ですね。ケガまでして」

紗弓実が俺の指を優しく手に取った。絆創膏の上から、細い指先に撫でられる。

「手伝わなくて言っちゃたはずですよ」

「俺一人で完成させれば手伝ったことにはならないかと思ってる」

「詭弁です」

「いててっ!」

針で刺したばかりの指先をぎゅっと握られる。痛がる俺を見て、紗弓実がおかしそうに笑った。そして、俺の手を愛しそうに両手で包み込む。

「京太郎。最後にもう一度、朝まで頑張ってみましょうか」

驚いて紗弓実の顔を見る。真つすくこちらを見返す瞳には、決意の色が浮かんでいた。

「京太郎よりも先に当の私が諦めるなんて、情けないですからね」

「間に合うのか?」

「……間に合いません」

紗弓実にしては珍しく、根拠の存在しない台詞だった。

「もしかすると、出来の悪いものが出来上がるかもしれない。でも、持久走対決のときに学びましたから。頑張れば、最後にはきっといいことが起こるって」

その台詞が恥ずかしかったのか、頬をわずかに染めた紗弓実に糸と針を奪われた。手馴れた様子でちくちくと縫い始める。二日間の努力が窺える腕前で、すいすいと糸が通っていく。

「何でもいい、手伝わよ」

「ええ。もう、こうなったら血を吐くまでこき使うことにします」

冗談に聞こえないが、紗弓実のためなら血反吐くらい何てことはない。

「とりあえず、栄養ドリンクを買ってきてもらってもいいですか?」

「わかった」

さっそく上着を着込んで、最寄りのコンビニに向か

う準備をする。部屋から出ようとすると、紗弓実に呼び止められた。

「京太郎、今日は寝かせませんよ」

「望むところだ」

ふざけあって軽く笑うと、俺は栄養ドリンクを求めてコンビニへ向かった。

★

卒業式を終え、卒業生たちが講堂から出てくる。外に待機していた在校生が、拍手と共に出迎えた。生徒達が行き交う中に望月さんを発見し、近寄っていく。向こうも俺たちに気付き、互いに歩み寄る。

「二人とも、来てくれたのね」

「卒業おめでどうございます、望月さん」

「ふっふっふ」

横で悪役みたいな笑い方をする紗弓実。目の下できたクマのせいで本当に悪そうに見える。まあ、俺も似たようなツラになってるが。

「こちらは文字通り、一睡もしていないのだ。」

「この子、どうして笑っているの?」

「まあ聞いてやってください」

「ふっふっふ。望月さん、あなたは本当に良い友達を持ちましたね」

紗弓実は後ろ手に隠していたプレゼントを、望月さんに差し出した。

「プレゼントです。向こうに行っても、これがあれば私のことをいつでも思い出せますよ」

紗弓実が差し出したのは、形の整ったウサギのぬいぐるみだ。正面に伸びた四本の足が、望月さんに抱いてほしそうにしている。

細かい部分に糸のほつれがあったり、足の裏から少しだけ綿が出たりしているが、どれも気にはならないレベルのものだ。

一時間前に完成したばかり、間違いなく最高傑作のぬいぐるみである。

望月さんは目を丸くしながらぬいぐるみを受け取



り、しげしげと眺めている。

「これ、あなたが？」

「ええ。ちよっとだけ、京太郎に手伝ってもらいましたけど」

紗弓実が小さく付け足した。

望月さんはぬいぐるみを、優しく胸に抱いた。紗弓実は眩しそうに見つめている。子供のころに渡せなかったプレゼントを、ようやく渡すことができたのだ。

「やっと、あの時のお返しをすることができました」

「あの時？ ……ああ」

望月さんが首を傾げたが、すぐに思い当たったのか表情を崩す。

「あんな昔のこと、まだ覚えていたのね」

「お互い様です」

望月さんは胸に抱えたぬいぐるみを見下ろした。数秒の間、その状態で沈黙が続く。心配になったらしい紗弓実が顔を覗き込むと、望月さんの肩が震え始めた。

「あ、ありがとう、嬉野さん」

「ああもう、本当に泣くなんて。調子が狂うのでやめてください！」

わたたと慌てる紗弓実の目にも涙がたまり始めた。望月さんを泣かせるという建前上の作戦は成功したようだ。自分にもダメージがあったようだが。涙の溢れる目尻を、望月さんが拭った。

「いつか、お礼をしなくてはいけないわね」

「いえ、そもそもこれは私にとってのお返しで」

紗弓実が途中で言葉を切った。

「……そうですね。次に会うときは期待していますよ」

「ええ。またいつか絶対に会いましょうね、嬉野さん」

二人は再会の約束をして、固く握手をした。絆創膏だらけの指を見られて照れくさそうな紗弓実の顔を、望月さんは満足そうに見つめている。

「ほら、生徒会の後輩が呼んでますよ」

「ええ、それじゃあね嬉野さんに寛君。向こうに着いたらメールするわ」

紗弓実が手を離すと、望月さんは後輩たちのほうへ歩き出した。次にこうやって会えるのは、いつだろうか。

「京太郎、ありがとうございました」

振り返った紗弓実は、屈託ない笑みを浮かべていた。目元には涙の跡が残っていて、湿り気を帯びた睫毛が、目を浴びてきらきらとしていた。

紗弓実が腕に抱きついてくる。周囲の生徒達にちらちらと見られているが、気にしていないようだ。

「京太郎には助けられてばかりですから。いつかきつと、私が京太郎を助けてあげますね」

「じゃあとりあえず、部屋の片づけから頼む」

今の俺の部屋には、糸くずや布切れが散乱している。中でもひどいのは、失敗した二体のぬいぐるみの残骸だ。夜中に歩き出しそうでかなり怖い。

「えー、やりがいがいいですねー」

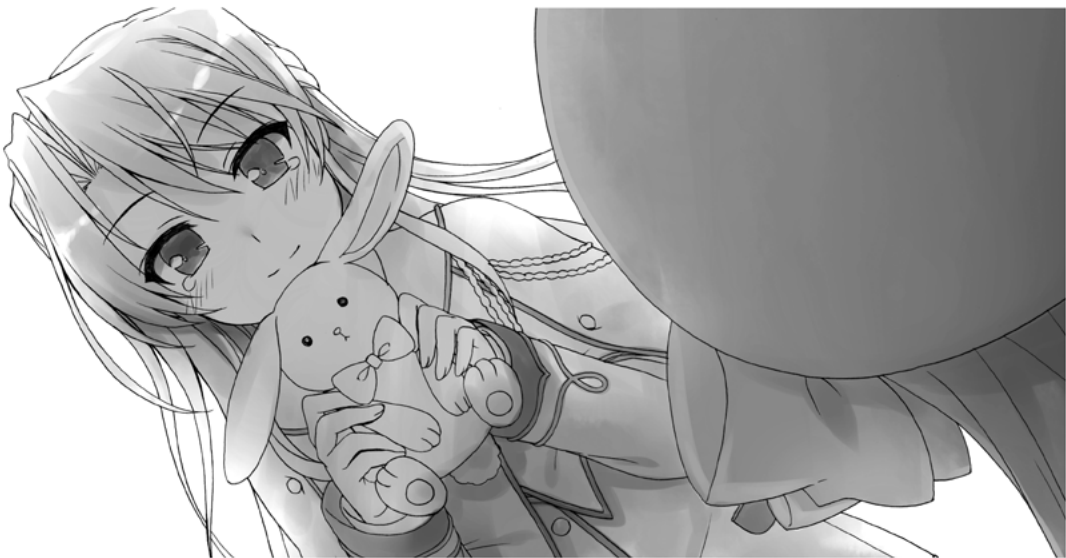
ぶーぶーと文句を言う紗弓実。

心地のよい重さを腕に感じながら、図書館の連中を探して歩き始める。

一年後に自分が卒業を迎える瞬間も、こうして紗弓実と共に歩いているのだろう。

すれ違う卒業生たちを尻目に、そんなことを考えていた。

END



PSVITA 専用ソフト

大図書館の羊飼

a good librarian like a good shepherd

Library Party

2月12日発売!

はい! 『大図書館の羊飼』3作品、
新キャラ添えてまとめてお届け致します!

PlayStation Vita® 専用ソフト / CERO区分: D

初回限定版 8,800円+税 通常版 6,800円+税 ダウンロード版 5,800円+税

シナリオ: 榊原拓 ほか / 原画: べっかんこう・夏野イオ

TVアニメ化もされた人気作『大図書館の羊飼』が、『しっぽデイズ』
『Dreaming Sheep』と一緒に3本まとめて1本のソフトとしてPS Vitaに
移植されます。新規イベントシーンはもちろん、”伝説の羊飼”の新キャラ
クターも追加登場し、さらに物語を盛り上げます。

初回限定版は原画家2名の描き下ろしイラスト満載のビジュアルブックや
書き下ろしライトノベル、12枚組コースターや白崎つぐみのおやすみCDな
ど盛りだくさんの豪華7大特典つき。2月12日、いよいよ発売です!

<http://aria-soft.com/daito/>



●新キャラクター
三之江金魚
CV.小澤亜李

べっかんこう (以下「べ」) : さあ、久しぶりに対談の時間がやってきました!

榊原拓 (以下「榊」) : アニメの『大図書館の羊飼』が始まりましたね。見てますか?

べ: 毎週楽しく見てますよー。面白いです。

榊: 僕もです。結構キャラの動きがあるので、当たり前なんですけど、おおおアニメだ!って感動してます。

べ: アニメならではの!って感じですよ。

榊: やっぱり動いてナンボというか、僕らが作ってるゲームは一枚絵の完成度を上げるのにこだわりますが、アニメは動きがかわいいと思えました。

べ: あと僕の方では、ゲームでは絵がなかった部分もこうなっていたのか!と新たな発見があったりします。

榊: あー、なるほど。

べ: 冬コミの時点で最終回直前でしたっけ?

榊: いえ、12話の放送はクリスマスイブだったと思います。

べ: すごいタイミング(笑) じゃあこの冊子を配布する頃には終わってるんですね。

榊: 対談を読んでいる皆さんが最後まで楽しんでくれてたなら嬉しいなと。

べ: ですね。さて、来年はPSVITA版の発売もありますよ。

榊: PSVITA版、今こっちはデバッグでてんでこまいです。

べ: 僕の方はゲーム制作の方は終わって特典などを描いているところ。

榊: もう少しなので、最後のクオリティアップ、頑張ってます!

べ: 初回限定版は色々つきますので楽しみに。

榊: 特典といえば原画家二人の本、僕はまだ全然見てないんですが、どうなるか楽しみにしてます。

べ: シナリオの特典ノベルも楽しみにしてますよ?

榊: プレッシャーの掛け合い(笑)

べ: とところでPSVITA版には一之江金魚って新キャラがいて、PC版をプレイされた方も、金魚ちゃんルートは是非プレイしてもらいたいです。

榊: 同感です。いいキャラになったんじゃないかなと。ちなみに金魚ルートにはしほげデイズの二人も登場したりしますよ。

べ: 発売は2月12日予定です。まだ予約も間に合いますので是非!

榊: では最後に新作の話もしましょう。こちらは本文を書き始めています。

べ: 絵の方はなかなか取り掛かれていないんですが、水面下で色々準備中です。

榊: 今回は衣装のデザイン大変そうですね。私服なんかも、一筋縄では行かないというか。

べ: 現代日本ものではないので、世界観を作っていかなければいけないのが大変です。それはそれで楽しいんですが。

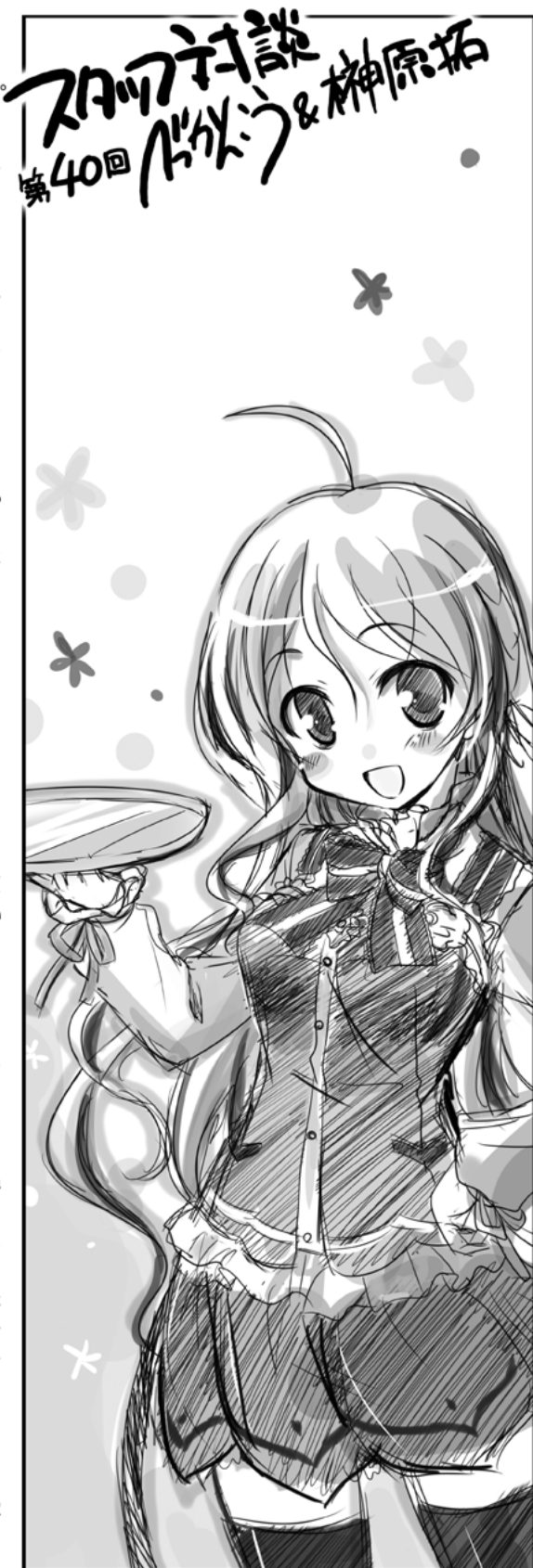
榊: 言われてみればシナリオも同じです。『大図書館の羊飼』は現代日本で良かったんですが、今作はどこが違うところがあるのか、書きながら決めていく部分も多いです。もちろん設定は作ってはいるんですが、たとえば携帯電話の形はどうなってるんだろう?とか。

べ: 考え始めるとキリがないですよ。

榊: でも、考えてるのは楽しいんですよ。あっという間に時間が過ぎていきます。

べ: そろそろ本格的に開発に入れるので、これからもっと情報や画像をお見せ出来るようになると思います。楽しみに!

2014.12.4 17:50 社内にて



POSTSCRIPT - あとがき

オフィシャルハンドブックをお読み頂き、ありがとうございました。
お楽しみ頂けましたでしょうか。

現在、開発室では新作「千の刃濤、桃花染の皇姫」の開発と、PCVITA版「大図書館の羊飼い-Library Party-」のデバッグが同時進行しています。

PSVITA版の方はそろそろ終了し、その後は全力で「千の刃濤、桃花染の皇姫」の開発に取り組んでいくことになる予定です。

さて新作の開発では今の時期、原画やCG、シナリオなど各パートが「もっと面白くするにはどうすればいいか?」「もっと愛されるキャラクターにするにはどうすればいいか?」と頭を絞ります。

もう少しすると、あとはひたすら手を動かして描く(書く)工程に入りますが、その前の、大きくいじることができる最後のタイミングからです。

皆様のご期待に応えられる作品になるよう取り組んでまいりますので、どうぞ続報にもご注目くださいませ。

それでは、今回はこの辺で。

今後ともオーガスト/ARIAをよろしく願い致します。

2014年冬 オーガスト/ARIAスタッフ一同

オーガストオフィシャルハンドブック

2015年新春号

※禁無断転載・無断複製

最新情報満載!

オフィシャルホームページにぜひお越し下さい!

<http://august-soft.com/>

<http://aria-soft.com/>

大図書館の羊飼い
a good librarian like a good shepherd
Library Party



大図書館の羊飼!

a good librarian like a good shepherd
Library Party

オーガストオフィシャルハンドブック
2015年新春号

